Bulletin of The Faculty of Education
The Department of Educational Psychology
1983, Vol. 30, 41－61.

「中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究」の補足分析*

久世敏雄　後藤宗理[1)]　浅野敬子[2)]
二宮克美　宮沢秀次[3)]　宗方比佐子[4)]
大野　久[4)]

I 問　題

青年期の社会的態度が形成される過程を検討する目的で，われわれは，中学生・高校生を対象に，8年間にわたる縦断的調査を行なってきた。そして，社会的態度を，保守的態度，革新的態度，大衆社会的態度の3つの側面からとらえることにして，質問紙調査法による資料の収集を行ない，分析を加えた（久世ほか，1979，1980，1981a，1981b，1982)。

これまでの報告では，3つの主要な目的に沿って分析がなされてきた。第1の目的は，青年期の社会的態度の形成過程についての全般的傾向を明らかにすることである。この目的のために，中学1年から高校Ⅲ年までの6年間の各態度得点の平均値の推移，各態度の学年間（時点間）相関の変化，3つの態度間の相互相関の推移，そして学年間の変動量についての検討がなされた（久世ほか，1979，1980)。得られた知見をまとめてみると，次のようである。①保守的態度と革新的態度は，男女とも大きな変動はなく，全体として安定した傾向を示している。②大衆社会的態度は，男女とも中学から高校にかけて次第に強くなる傾向がある。そして，この傾向は一貫したものである。③3つの各態度の関係は，6年間を通して男女を問わず，保守的態度と革新的態度との間には負の相関関係が，保守的態度と大衆社会的態度との間には正の相関関係がみられる。

第2の目的は，調査に用いられた39項目の関連性を明らかにすることである。本研究では，3つの態度のそれぞれについて13の質問項目を用意し，各項目の評定値の合計点を態度得点とした。そして，項目の関連性を明らかにする目的で，39項目について因子分析による検討を加えた（久世ほか，1980)。その結果，大衆社会的態度，保守的―革新的態度，権威主義的―政治的無関心，伝統的価値観という4つの因子が見出された。また，社会的態度は中学・高校の6年間に構造化・安定化の過程をたどること，さらに大衆社会的態度因子には高い一貫性，安定性がみられることなどが明らかにされた。

第3の目的は，個々の青年の社会的態度の変容過程を明らかにすることにかかわっている。この目的のために，クラスター分析や大衆社会的態度の得点水準による被調査者の類型化と，項目および個人の6年間の資料の個別的分析という2つの観点から，個人の変容過程の解明が試みられた（久世ほか，1979，1980，1981a，1982)。

ところで，上に述べた分析は，すべて，名古屋大学教育学部附属中学校に昭和47年度，48年度，49年度に入学し，附属高校を昭和52年度，53年度，54年度に卒業した男女生徒140名の資料に基づいている。これまでに得られた知見が社会的態度の形成過程を理解するための資料として，ひろく受け入れられるためには，上記の被調査者の資料が，一般の中学生・高校生を代表するものであるか否かについての検討が必要になるだろう。

資料の代表性を検討するために，われわれは，これまでに，この被調査者とは異なる中学・高校に在籍する生徒を対象に横断的調査を行ない，資料の比較検討を行なった（久世ほか，1974)。また，名古屋大学教育学部附属中学校・高校で昭和47年度から54年度までに収集された調査資料のなかから，中学3年間あるいは高校3年間の資料が完全に揃っているすべての被調査者の資料を選び出し，学年ごとの各態度得点の平均値と態度別学年間相関および学年別態度間相関を算出し，検討した（久世ほ

＊　本研究の資料分析のための計算は，名古屋大学大型計算機センター FACOM M－200によった。
1）名古屋市立保育短期大学助教授
2）中京女子大学家政学部講師
3）名古屋経済大学講師
4）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期）

か，1981 b)。これらの分析結果は，縦断的研究によって示された全般的な傾向が，概ね支持できるものであることを示している。

しかし，この附属中学校・高校の資料による分析には，問題点がないわけではない。すなわち，ここで用いられた資料，例えば中学3年間有効な資料には，昭和47年度から52年度に附属中学校に入学し，昭和49年度から54年度に卒業した生徒のものが一括して扱われている。すなわち，最大で6年間の時間的な差があるものを同じ学年の資料としてひとまとめにしている。最近コホート分析の必要性が論じられることが多いが，時代差・時間差を考慮した上で多くの知見を一般化することが重要であろう。

しかしまた，コホート分析とは別に，縦断的資料の被調査者と同じ時期に同じ学校で生活し，調査も受けていながら，分析の対象から除外された生徒の資料について比較することも意味があると思われる。縦断的研究では，研究が進むにつれて，当初の調査対象の中から除外される者が回を追って現われてくる。除外される理由はさまざまであろうが，これらの資料と最終的に残った有効資料との比較を通して，代表性を検討することも必要と思われる。そこで本研究では，縦断的資料の被調査者となっている生徒と同じ時期に名古屋大学教育学部附属高校生であったもののうち，附属中学校以外の中学校を卒業したのち，附属高校へ入学してきた生徒の資料をとり上げて，縦断的資料との比較分析を行なうことにする。

さて，縦断的資料の分析に関するもう1つの問題は，態度構造の変化に関わるものである。これまで，青年期の社会的態度を，われわれは，保守的態度，革新的態度，大衆社会的態度の3つの側面からとらえてきた。そして因子分析による態度構造の検討を行ない，その結果得られた4因子について，中学から高校の6年間にどのように変動するかの検討も行なった（久世ほか，1980)。しかし，もともと研究の出発点で設定した3つの態度の内部構造がどのように変化していくかの検討は，これまでなされていない。本研究では，この3つの態度の内的整合性を調べ，3つの態度は安定した枠組をもっているのか，すなわちわれわれが設定した態度の枠組が中学生や高校生のもつ枠組とどの程度一致しているのか，枠組に変化があるとすれば青年期にどのように変わっていくのかについて検討する。

Ⅱ 方　法

1. 社会的態度の質問紙

社会的態度を測定するための質問紙は，保守的，革新的，および大衆社会的態度として用意されたそれぞれ13項目，計39項目の質問から構成されている。そして39の各項目に対して，非常に賛成，賛成，賛成とも反対ともいえない，反対，非常に反対の5点尺度で評定を求めた。被調査者の各項目への反応に対して，非常に賛成の場合5点，賛成の場合4点，賛成とも反対ともいえない場合3点，反対の場合2点，非常に反対の場合1点を与え，3つの社会的態度ごとに合計値を算出した。以下，態度得点という場合は，この合計値をさし，数値が大きいほどその態度が強いことを意味している。

なお，具体的な質問項目は表4に示した。

2. 被調査者

被調査者は，これまでの報告と同様に，名古屋大学教育学部附属中学校および高等学校の生徒であるが，今回分析に用いた資料は，次の2グループから得られたものである。①昭和47年度，48年度，49年度にそれぞれ上記附属中学校に入学し，昭和50年度，51年度，52年度に同附属高校に進学，昭和52年度，53年度，54年度に同高校を卒業した男女生徒のうち，毎年度この調査をもれなく受けた合計140名（男子70名，女子70名）のグループ〔以下，完全データ群と呼ぶ〕。②昭和50年度，51年度，52年度にそれぞれ上述の附属高校に入学し，完全データ群と同じ時期に高校生活を送って，昭和52年度，53年度，54年度に同高校を卒業した男女生徒のうち，高校3年間この調査をもれなく受けた合計138名（男子70名，女子68名）のグループ〔以下，追加群と呼ぶ〕。

なお，調査の実施方法はクラスごとの集団実施によった。また，調査時期は各学年の年度末であった。

Ⅲ 結　果

1. 完全データ群と追加群の態度得点の平均値および相関係数の比較

1) 態度得点の平均値の比較

高校Ⅰ年からⅢ年までの各態度の態度得点の平均値を完全データ群と追加群に関して，男女別に示したものが表1である。男女それぞれについて，2（群）×3（学年）の分散分析を行なったところ，男女とも，保守的態度，革新的態度，大衆社会的態度を問わず，群の主効果をはじめ，学年の主効果，群×学年の交互作用のいずれについても有意な結果はみられない。したがって，少くとも態度得点の水準では，完全データ群と追加群とでは著しいちがいはないと考えられる。

2) 各態度の時点間相関

各態度の学年間相関を完全データ群と追加群とに関して男女別に示したものが表2である。男女，群を問わず，

表1　群別にみた高校3年間の各社会的態度得点の平均値と標準偏差

態度	群	性別 / 学年 / 平均・標準偏差	男子 高Ⅰ	男子 高Ⅱ	男子 高Ⅲ	女子 高Ⅰ	女子 高Ⅱ	女子 高Ⅲ
保守的	完全データ群	M	35.49	35.73	35.47	33.61	34.81	34.24
		SD	4.41	4.71	5.24	5.08	5.00	5.80
	追加群	M	33.99	34.63	34.23	33.22	33.40	33.88
		SD	6.57	5.32	6.05	5.05	5.71	5.05
革新的	完全データ群	M	46.86	46.43	46.71	45.56	45.43	46.04
		SD	4.69	4.96	4.74	4.37	4.57	4.59
	追加群	M	47.77	47.20	47.63	46.78	47.47	46.53
		SD	5.57	5.17	5.82	4.22	4.38	4.45
大衆社会的	完全データ群	M	35.23	35.16	34.50	36.27	36.63	36.34
		SD	6.62	6.03	6.59	5.99	6.08	6.08
	追加群	M	35.14	35.76	35.09	34.49	35.07	35.37
		SD	7.01	6.41	6.66	4.63	6.08	4.94

表2　群別にみた各社会的態度の時点間相関

性別	群	学年 / 態度	高Ⅰ—高Ⅱ	高Ⅱ—高Ⅲ	高Ⅰ—高Ⅲ
男子	完全データ群	保守的態度	0.629 ***	0.644 ***	0.624 ***
		革新的態度	0.561 ***	0.517 ***	0.464 ***
		大衆社会的態度	0.635 ***	0.685 ***	0.549 ***
	追加群	保守的態度	0.658 ***	0.560 ***	0.417 ***
		革新的態度	0.645 ***	0.661 ***	0.434 ***
		大衆社会的態度	0.583 ***	0.717 ***	0.417 ***
女子	完全データ群	保守的態度	0.722 ***	0.791 ***	0.714 ***
		革新的態度	0.523 ***	0.720 ***	0.535 ***
		大衆社会的態度	0.818 ***	0.811 ***	0.832 ***
	追加群	保守的態度	0.802 ***	0.781 ***	0.721 ***
		革新的態度	0.744 ***	0.720 ***	0.622 ***
		大衆社会的態度	0.684 ***	0.732 ***	0.607 ***

注）　表中，***印は相関係数の有意性が$p < .001$であることを示す。

いずれの態度についても学年間相関はすべて有意な正の相関を示している。つまり，完全データ群でも追加群でも，3つの態度は安定した傾向を示している。

3）態度間相関の推移

3つの態度の相互相関を学年ごとに示したものが表3である。

両群とも高校3年間を通じて，保守的態度と革新的態度との間，および革新的態度と大衆社会的態度との間に負の相関関係が，また大衆社会的態度と保守的態度との間に正の相関関係が認められる。

男子では，両群とも高校3年間を通じて，保守的態度と革新的態度との間に有意な負の相関がみられる。そのほか，完全データ群では，高校Ⅱ年とⅢ年に大衆社会的態度と保守的態度との間で有意な正の相関がみられる。一方，追加群では，高校Ⅲ年で革新的態度と大衆社会的態度との間に有意な負の相関がみられる。また，高校Ⅰ年とⅢ年に，大衆社会的態度と保守的態度との間で有意

表 3　群別にみた各学年における 3 つの態度の相関

性別	群	態度 ＼ 学年	高 Ⅰ	高 Ⅱ	高 Ⅲ
男子	完全データ群	保守的 — 革新的	− 0.253 *	− 0.322 **	− 0.405 ***
		革新的 — 大衆社会的	− 0.020	0.022	− 0.231
		大衆社会的 — 保守的	0.179	0.327 **	0.547 ***
	追加群	保守的 — 革新的	− 0.488 ***	− 0.619 ***	− 0.558 ***
		革新的 — 大衆社会的	− 0.130	− 0.187	− 0.500 ***
		大衆社会的 — 保守的	0.365 **	0.005	0.312 **
女子	完全データ群	保守的 — 革新的	− 0.456 ***	− 0.469 ***	− 0.489 ***
		革新的 — 大衆社会的	− 0.202	− 0.221	− 0.328 **
		大衆社会的 — 保守的	0.407 ***	0.531 ***	0.619 ***
	追加群	保守的 — 革新的	− 0.372 **	− 0.471 ***	− 0.485 ***
		革新的 — 大衆社会的	− 0.244 *	− 0.309 **	− 0.202
		大衆社会的 — 保守的	0.443 ***	0.536 ***	0.480 ***

注）　表中＊印は相関係数の有意性が p<.05，＊＊印は p<.01，＊＊＊印は p<.001 であることを示す。＊，＊＊，＊＊＊印については，表 4，表 5 においても同様である。

な正の相関が認められる。

女子では，高校 3 年間を通じて両群に共通した傾向が認められる。すなわち，保守的態度と革新的態度との間，および革新的態度と大衆社会的態度との間には負の相関が，大衆社会的態度と保守的態度との間には正の相関がある。しかもこれらの相関は，一部の学年を除いてすべて統計的に有意である。

これらの結果は，男子の場合，3 つの態度の相互関係は，完全データ群でも追加群でも高校Ⅲ年までにかなり明確になってくるが，女子では，両群とも高校Ⅰ年の時点ですでにはっきりしていることを示している。

2. 完全データ群と追加群の項目別平均値の比較

完全データ群と追加群の比較を項目水準で行なうために，各態度項目について，2（群）×3（学年）の分散分析を行なった。両群の項目別平均値・標準偏差と分散分析の結果を表 4，表 5 に示した。

本研究は，完全データ群と追加群との全般的傾向を比較検討することを主な目的としているので，ここでは，群に関する主効果のみられた項目だけをとり上げていくことにする。

表 4　項目別平均値・標準偏差と分散分析の結果（男子）

項目 ＼ 学年	群 ＼ 平均・標準偏差		高 Ⅰ	高 Ⅱ	高 Ⅲ	主効果 群	主効果 学年	交互作用
1　国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい	完全データ群	M	2.00	2.07	2.14			
		SD	0.83	0.79	0.98			
	追加群	M	2.01	2.03	1.99			
		SD	0.99	0.99	0.93			
2　女が政治などに口だしすべきでない	完全データ群	M	2.67	2.47	2.54			
		SD	1.05	0.97	1.03			
	追加群	M	2.57	2.67	2.67			
		SD	1.16	1.09	1.16			

3	結婚は家柄を重んじなければならない	完全データ群	M SD	1.89 0.93	1.96 0.79	2.06 0.95	*	
		追加群	M SD	1.80 1.06	1.66 0.78	1.73 0.80		
4	伝統や習慣は尊重すべきである	完全データ群	M SD	3.37 0.90	3.49 0.76	3.59 0.75		
		追加群	M SD	3.27 1.12	3.29 0.94	3.24 0.86		
5	世間をわたるには義理や人情が最も大切である	完全データ群	M SD	3.13 0.95	2.97 0.90	3.03 0.88		**
		追加群	M SD	3.40 1.07	3.10 0.85	2.96 0.97		
6	長男が家をつぐのは当然だ	完全データ群	M SD	2.57 0.99	2.40 0.91	2.49 0.81		**
		追加群	M SD	2.11 0.86	2.63 0.94	2.27 0.92		
7	親孝行は子どもの義務である	完全データ群	M SD	3.93 0.77	3.87 0.74	3.70 0.77		
		追加群	M SD	3.79 0.96	3.70 1.03	3.80 0.79		
8	目上の人にはもっと敬語を使った方がよい	完全データ群	M SD	3.39 0.92	3.44 0.75	3.40 0.81		
		追加群	M SD	3.26 1.06	3.49 0.97	3.37 0.95		
9	学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである	完全データ群	M SD	2.34 0.90	2.41 0.79	2.34 0.87		
		追加群	M SD	2.29 0.87	2.24 1.01	2.23 0.97		
10	世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない	完全データ群	M SD	3.16 1.07	3.36 0.72	3.24 0.82		** *
		追加群	M SD	2.77 0.97	3.23 0.90	3.27 0.95		
11	日本は天皇を中心にまとまるべきである	完全データ群	M SD	1.87 0.87	2.11 0.96	1.93 0.86		*
		追加群	M SD	1.90 1.00	1.76 1.03	1.73 1.02		
12	デモやストでさわぐのは民主国家の恥である	完全データ群	M SD	2.39 0.89	2.40 0.86	2.34 0.68		
		追加群	M SD	2.31 0.99	2.34 0.98	2.31 0.99		
13	家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい	完全データ群	M SD	2.79 1.05	2.77 1.04	2.67 0.90		
		追加群	M SD	2.50 0.91	2.50 0.90	2.66 1.05		

14	個人の自由は尊重すべきである	完全データ群	M	4.20	4.16	4.16			
			SD	0.67	0.72	0.74			
		追加群	M	4.30	4.31	4.30			
			SD	0.71	0.83	0.75			
15	正しいことであれば世間体など気にすべきでない	完全データ群	M	3.61	3.86	3.86			
			SD	0.98	0.80	0.77			
		追加群	M	3.74	3.79	3.81			
			SD	0.94	0.90	0.94			
16	いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごとは断った方がよい	完全データ群	M	3.80	3.74	3.71			
			SD	0.86	0.88	0.73			
		追加群	M	3.91	3.94	3.81			
			SD	0.94	0.96	0.91			
17	社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである	完全データ群	M	3.61	3.47	3.53			
			SD	0.84	0.78	0.76			
		追加群	M	3.59	3.50	3.56			
			SD	0.88	0.94	0.85			
18	いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである	完全データ群	M	3.77	3.56	3.64			
			SD	0.94	0.96	0.87	*		
		追加群	M	3.94	3.96	3.97			
			SD	0.93	1.06	0.83			
19	デモやストをするのは労働者の当然の権利である	完全データ群	M	3.66	3.67	3.63			
			SD	0.96	0.88	0.73			
		追加群	M	3.54	3.37	3.74			
			SD	1.20	1.19	1.10			
20	先輩の意見でも，まちがっていると思えば，納得できるまで議論する	完全データ群	M	4.00	3.86	3.76			
			SD	0.80	0.73	0.77			
		追加群	M	3.91	3.86	3.81			
			SD	0.83	0.92	0.84			
21	男女の交際は全く自由であり，まわりの人がとやかく言うべきでない	完全データ群	M	3.99	3.89	3.84			
			SD	0.79	0.83	0.99			
		追加群	M	4.17	4.07	3.93			
			SD	0.85	1.00	0.98			
22	政治をよくするためには，もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである	完全データ群	M	3.23	3.21	3.29			
			SD	0.87	0.74	0.64			
		追加群	M	3.37	3.40	3.27			
			SD	0.92	0.94	0.92			
23	家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである	完全データ群	M	2.84	2.80	2.79			
			SD	0.94	0.86	0.98			
		追加群	M	2.69	2.39	2.64			
			SD	1.03	1.07	1.08			
24	「方角が悪い」などということはまったく信用しない	完全データ群	M	3.01	3.13	3.23			
			SD	1.11	0.93	1.05	**		
		追加群	M	3.41	3.50	3.66			
			SD	1.23	1.18	1.06			

25	結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい	完全データ群	M	3.54	3.54	3.74		
			SD	0.97	1.00	0.85		
		追加群	M	3.47	3.46	3.49		
			SD	1.11	0.96	0.90		
26	家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである	完全データ群	M	3.59	3.54	3.54		
			SD	0.86	0.93	0.72		
		追加群	M	3.71	3.66	3.63		
			SD	0.92	0.87	0.87		
27	流行語などはよく知っていないとはずかしい	完全データ群	M	2.80	2.66	2.57		
			SD	0.99	0.80	0.97		
		追加群	M	2.71	2.73	2.64		
			SD	1.08	1.06	1.04		
28	労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない	完全データ群	M	2.80	2.86	2.84		
			SD	0.93	0.86	0.85	*	
		追加群	M	3.17	3.09	3.14		
			SD	1.17	1.18	1.15		
29	みんなが見ているテレビ番組を見ていないと，とりのこされる気がする	完全データ群	M	2.24	2.39	2.27		
			SD	0.97	0.94	0.95		
		追加群	M	2.39	2.41	2.41		
			SD	1.01	1.08	1.15		
30	国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない	完全データ群	M	1.94	1.89	1.94		
			SD	0.83	0.55	0.88		
		追加群	M	1.81	1.74	1.71		
			SD	0.94	0.85	0.75		
31	中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい	完全データ群	M	2.99	2.91	2.76		
			SD	1.04	0.97	0.92		
		追加群	M	3.00	3.10	2.89		
			SD	1.25	1.17	1.19		
32	理論よりフィーリングやムードが大切である	完全データ群	M	2.94	2.93	2.84		
			SD	0.99	0.84	0.79		*
		追加群	M	2.96	2.97	2.69		
			SD	1.12	0.99	0.96		
33	誰が衆議員の選挙で当選しようと日本の政治はかわらないと思う	完全データ群	M	3.43	3.49	3.36		
			SD	1.25	1.15	1.04		
		追加群	M	3.26	3.29	3.23		
			SD	1.39	1.24	1.23		
34	今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい	完全データ群	M	2.94	2.93	2.89		
			SD	1.12	0.94	0.97		
		追加群	M	2.96	2.94	2.97		
			SD	1.10	1.10	1.06		
35	共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする	完全データ群	M	2.66	2.73	2.86		
			SD	0.98	0.88	0.80		*
		追加群	M	2.56	2.70	2.86		
			SD	0.86	1.05	0.91		

36	ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどうだ	完全データ群	M SD	2.46 0.96	2.53 0.96	2.34 0.85		
		追加群	M SD	2.34 1.10	2.56 1.14	2.43 1.07		
37	いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない	完全データ群	M SD	3.30 1.01	3.23 1.13	3.31 1.02		
		追加群	M SD	3.29 1.17	3.46 1.18	3.40 0.95		
38	皆と同じような持物や服装をしていないとひけめを感ずる	完全データ群	M SD	2.81 1.03	2.76 0.98	2.54 0.96		
		追加群	M SD	2.77 1.01	2.84 1.03	2.73 0.92		
39	公害問題は被害者と加害者だけの問題である	完全データ群	M SD	1.91 1.00	1.87 0.92	1.97 0.92		
		追加群	M SD	1.93 1.11	1.93 1.04	1.99 1.03		

注）　項目番号１～13は保守的態度項目，14～26は革新的態度項目，27～39は大衆社会的態度項目である。表５においても同様である。

表５　項目別平均値・標準偏差と分散分析の結果（女子）

項目	学年 / 平均・標準偏差 / 群		高Ⅰ	高Ⅱ	高Ⅲ	主効果 群	主効果 学年	交互作用
1	国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい	完全データ群	M SD	2.16 0.81	2.23 0.82	2.26 0.83			
		追加群	M SD	2.09 0.88	2.21 0.94	2.25 0.74			
2	女が政治などに口だしすべきでない	完全データ群	M SD	1.90 0.90	1.87 0.78	1.84 0.85	*		
		追加群	M SD	1.60 0.76	1.62 0.98	1.65 0.84			
3	結婚は家柄を重んじなければならない	完全データ群	M SD	1.99 0.96	2.27 0.92	2.07 0.95			*
		追加群	M SD	2.03 0.85	1.94 0.90	1.85 0.85			
4	伝統や習慣は尊重すべきである	完全データ群	M SD	3.33 0.63	3.47 0.68	3.27 0.68			
		追加群	M SD	3.29 0.73	3.38 0.81	3.40 0.67			
5	世間をわたるには義理や人情が最も大切である	完全データ群	M SD	2.94 0.81	3.03 0.88	3.16 0.88			**
		追加群	M SD	3.07 0.80	2.88 0.82	2.91 0.69			

6 長男が家をつぐのは当然だ	完全データ群	M	2.36	2.41	2.04			**
		SD	0.92	0.97	0.89			
	追加群	M	2.06	2.10	2.28			
		SD	0.79	1.01	0.86			
7 親孝行は子どもの義務である	完全データ群	M	3.46	3.49	3.59			
		SD	0.77	0.78	0.84			
	追加群	M	3.62	3.65	3.71			
		SD	0.90	0.97	0.87			
8 目上の人にはもっと敬語を使った方がよい	完全データ群	M	3.23	3.54	3.41		*	
		SD	0.84	0.74	0.73			
	追加群	M	3.37	3.44	3.44			
		SD	0.79	0.72	0.74			
9 学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである	完全データ群	M	2.23	2.20	2.30			
		SD	0.75	0.63	0.79			
	追加群	M	2.13	2.09	2.09			
		SD	0.93	0.77	0.73			
10 世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない	完全データ群	M	2.99	3.21	3.17			
		SD	0.77	0.87	0.72			
	追加群	M	3.15	3.28	3.22			
		SD	0.85	0.81	0.69			
11 日本は天皇を中心にまとまるべきである	完全データ群	M	2.17	2.14	2.29			
		SD	1.01	0.91	1.00			
	追加群	M	1.97	1.91	2.01			
		SD	0.88	0.82	0.92			
12 デモやストでさわぐのは民主国家の恥である	完全データ群	M	2.50	2.47	2.49			
		SD	0.78	0.74	0.63			
	追加群	M	2.44	2.47	2.43			
		SD	0.89	0.92	0.78			
13 家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい	完全データ群	M	2.37	2.47	2.36			
		SD	0.87	0.97	0.90			
	追加群	M	2.40	2.43	2.65			
		SD	0.93	1.01	0.89			
14 個人の自由は尊重すべきである	完全データ群	M	4.17	4.13	4.07			*
		SD	0.54	0.64	0.62			
	追加群	M	4.04	4.25	4.21			
		SD	0.68	0.63	0.64			
15 正しいことであれば世間体など気にすべきでない	完全データ群	M	3.54	3.50	3.47	**		
		SD	0.77	0.78	0.79			
	追加群	M	3.97	3.76	3.76			
		SD	0.69	0.79	0.74			
16 いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごとは断った方がよい	完全データ群	M	3.87	3.97	3.91			
		SD	0.74	0.59	0.72			
	追加群	M	4.09	4.06	3.87			
		SD	0.71	0.77	0.75			

17	社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである	完全データ群	M SD	3.31 0.73	3.29 0.68	3.26 0.72	*	
		追加群	M SD	3.56 0.70	3.49 0.68	3.47 0.63		
18	いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである	完全データ群	M SD	3.69 0.93	3.56 0.85	3.63 0.80		
		追加群	M SD	3.82 0.85	3.88 0.87	3.72 0.88		
19	デモやストをするのは労働者の当然の権利である	完全データ群	M SD	3.31 0.79	3.33 0.85	3.59 0.69		*
		追加群	M SD	3.38 0.92	3.40 1.01	3.44 0.92		
20	先輩の意見でも，まちがっていると思えば，納得できるまで議論する	完全データ群	M SD	3.77 0.66	3.70 0.65	3.69 0.69	**	
		追加群	M SD	4.01 0.72	4.04 0.70	3.87 0.81		
21	男女の交際は全く自由であり，まわりの人がとやかく言うべきでない	完全データ群	M SD	3.66 0.99	3.74 0.86	3.76 0.79		
		追加群	M SD	3.72 0.93	3.75 0.87	3.68 0.80		
22	政治をよくするためには，もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである	完全データ群	M SD	3.20 0.58	3.33 0.74	3.37 0.57		
		追加群	M SD	3.21 0.80	3.37 0.79	3.22 0.54		
23	家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである	完全データ群	M SD	3.29 0.95	3.13 0.92	3.34 0.85		** **
		追加群	M SD	2.91 1.09	3.34 1.03	3.34 1.02		
24	「方角が悪い」などということはまったく信用しない	完全データ群	M SD	3.06 0.96	2.91 0.97	2.96 0.91		
		追加群	M SD	3.04 0.94	2.90 0.98	2.97 1.01		
25	結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい	完全データ群	M SD	3.06 1.03	3.26 0.93	3.34 0.92		**
		追加群	M SD	3.13 0.93	3.43 0.94	3.32 0.78		
26	家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである	完全データ群	M SD	3.63 0.85	3.59 0.86	3.66 0.81		
		追加群	M SD	3.88 0.80	3.81 0.85	3.66 0.78		
27	流行語などはよく知っていないとはずかしい	完全データ群	M SD	2.94 0.87	2.84 0.90	2.83 0.78		
		追加群	M SD	2.75 0.68	2.72 0.84	2.87 0.86		

28	労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない	完全データ群	M SD	3.01 0.86	2.96 0.84	3.01 0.89			
		追加群	M SD	2.79 0.78	2.84 0.86	2.99 0.97			
29	みんなが見ているテレビ番組を見ていないと，とりのこされる気がする	完全データ群	M SD	2.59 0.77	2.60 0.88	2.51 0.86			
		追加群	M SD	2.50 0.97	2.47 0.95	2.50 0.84			
30	国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない	完全データ群	M SD	2.14 0.73	2.20 0.71	2.16 0.77			
		追加群	M SD	1.94 0.71	2.09 0.94	1.87 0.64			
31	中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい	完全データ群	M SD	3.04 1.00	3.11 1.10	2.96 1.00	*	*	
		追加群	M SD	2.62 0.81	2.91 0.97	2.66 0.84			
32	理論よりフィーリングやムードが大切である	完全データ群	M SD	3.00 0.74	3.03 0.85	3.00 0.83			
		追加群	M SD	2.97 0.88	3.07 0.87	2.91 0.81			
33	誰が衆議員の選挙で当選しようと日本の政治はかわらないと思う	完全データ群	M SD	3.44 1.09	3.44 1.02	3.43 0.96			
		追加群	M SD	3.29 1.16	3.32 1.18	3.44 0.84			
34	今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい	完全データ群	M SD	3.20 1.09	3.03 1.08	2.93 1.16		**	
		追加群	M SD	3.28 1.03	3.22 0.99	3.09 0.94			
35	共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする	完全データ群	M SD	2.59 0.83	2.50 0.79	2.67 0.78	**	**	
		追加群	M SD	2.09 0.82	2.19 0.68	2.37 0.75			
36	ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどうだ	完全データ群	M SD	2.49 0.90	2.63 0.87	2.57 0.84	*		
		追加群	M SD	2.22 0.81	2.32 0.85	2.41 0.82			
37	いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない	完全データ群	M SD	3.17 1.02	3.40 0.97	3.43 0.94		**	
		追加群	M SD	3.12 0.92	3.24 0.99	3.50 0.87			
38	皆と同じような持物や服装をしていないとひけめを感ずる	完全データ群	M SD	2.86 0.86	2.87 0.87	2.93 0.82			
		追加群	M SD	3.04 0.84	2.93 1.00	2.93 0.72			

39	公害問題は被害者と加害者だけの問題である	完全データ群	M SD	1.80 0.77	2.01 0.77	1.91 0.74			*
		追加群	M SD	1.87 0.85	1.75 0.72	1.84 0.82			

1）男子について

表4に示したように，群に関する主効果だけがみられた項目は，項目3〔保守3〕（F（1,138）＝4.695，p<.05），18〔革新5〕（F（1,138）＝6.396，p<.05），24〔革新11〕（F（1,138）＝7.160，p<.01），28〔大衆2〕（F（1,138）＝5.651，p<.05）の4項目である。この4項目の学年別平均値を群ごとに図示したのが図1(1)〜(4)である。これらの項目の平均値をみてみると，項目3〔保守3〕「結婚は家柄を重んじなければならない」では，完全データ群の平均値よりも追加群の平均値の方が小さく，追加群の方が保守的でない傾向にある。同じように，項目18〔革新5〕「いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである」，項目24〔革新11〕「『方角が悪い』などということはまったく信用しない」の2項目

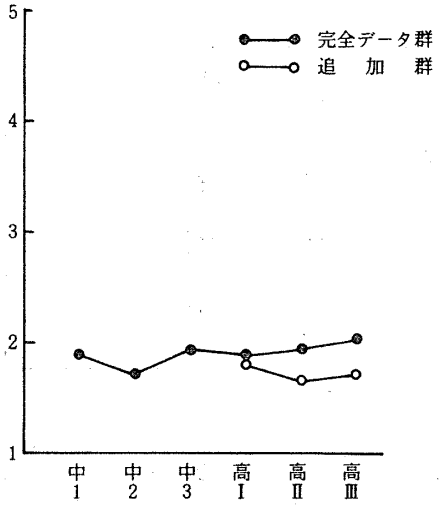

図1—(1) 完全データ群と追加群の項目別平均値の推移（保守3—男子）

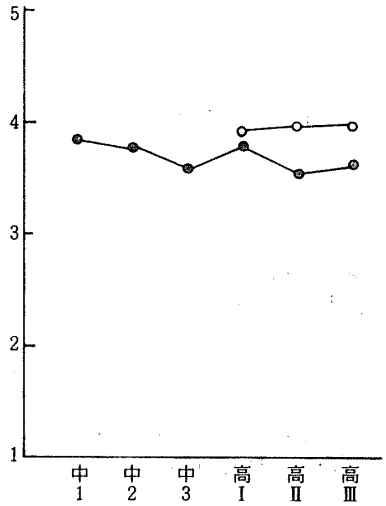

図1—(2) 完全データ群と追加群の項目別平均値の推移（革新5—男子）

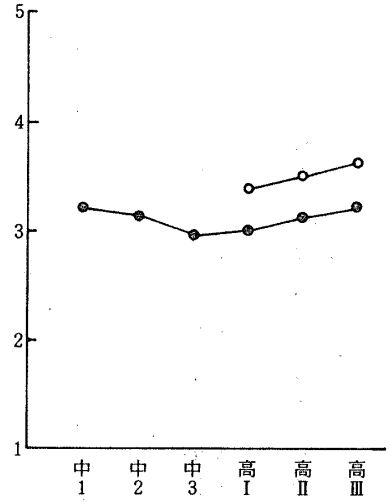

図1—(3) 完全データ群と追加群の項目別平均値の推移（革新11—男子）

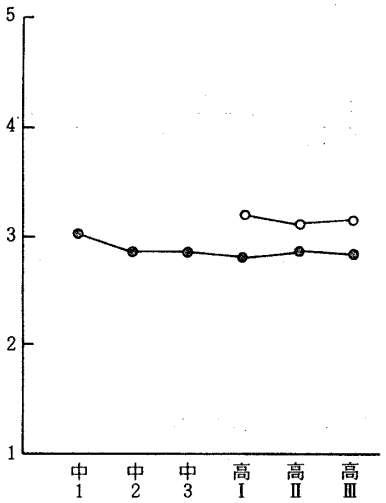

図1—(4) 完全データ群と追加群の項目別平均値の推移（大衆社会2—男子）

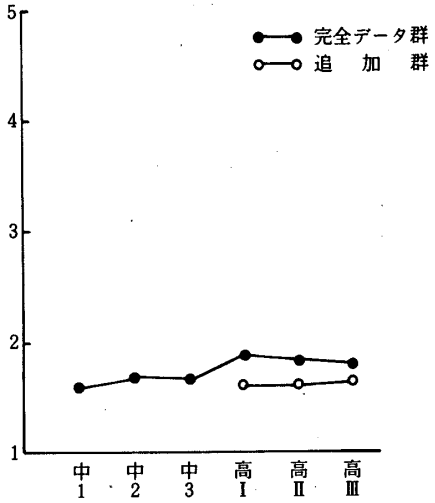

図2—(1)　完全データ群と追加群の項目別平均値の推移（保守2—女子）

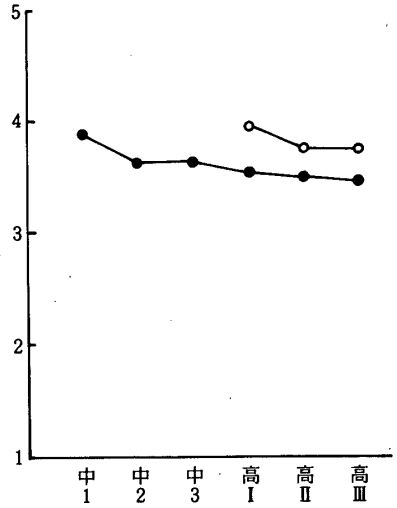

図2—(2)　完全データ群と追加群の項目別平均値の推移（革新2—女子）

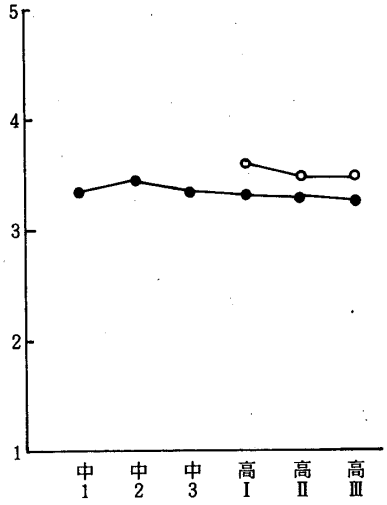

図2—(3)　完全データ群と追加群の項目別平均値の推移（革新4—女子）

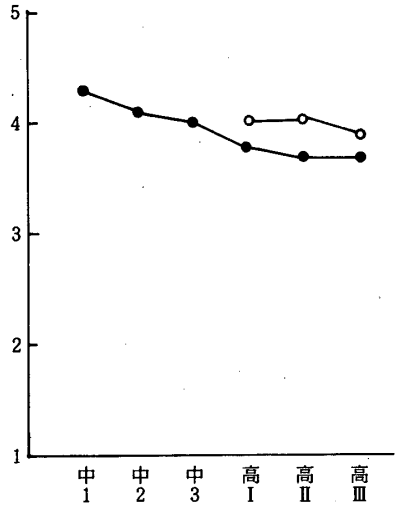

図2—(4)　完全データ群と追加群の項目別平均値の推移（革新7—女子）

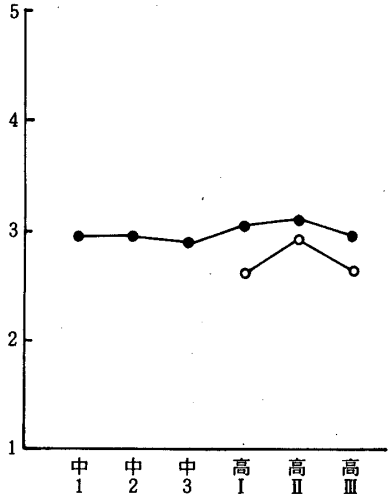

図2—(5)　完全データ群と追加群の項目別平均値の推移（大衆社会5—女子）

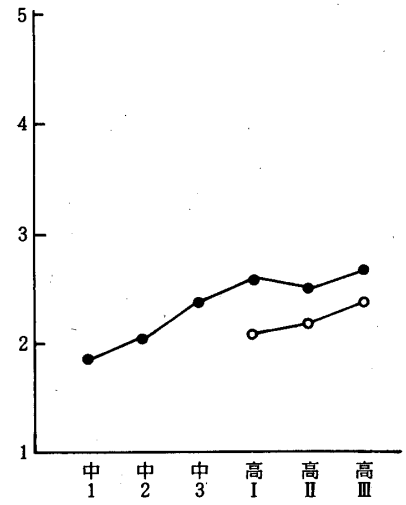

図2—(6)　完全データ群と追加群の項目別平均値の推移（大衆社会9—女子）

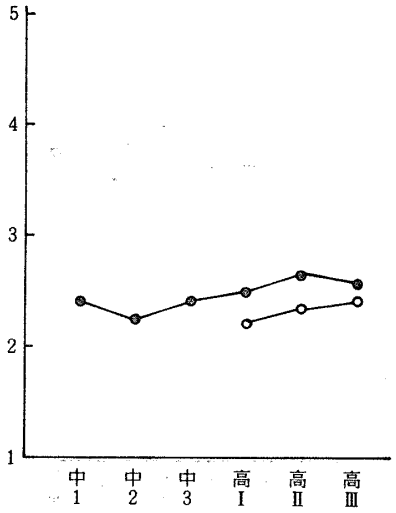

図2—(7) 完全データ群と追加群の項目別平均値の推移（大衆社会10—女子）

の平均値は，完全データ群よりも追加群で大きい。つまり，これらの項目では，追加群の方が革新的な傾向を示している。一方，項目28〔大衆2〕「労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない」の平均値は，完全データ群よりも追加群で大きく，追加群の方が大衆社会的である。

男子の結果をまとめてみると，39項目の中で群の主効果のみられた項目は4項目であり，項目水準でみても完全データ群と追加群との間には著しいちがいはみられないといえる。

2）女子について

表5にしたがって，群に関する主効果のみられた項目をあげてみる。保守的態度の項目では，項目2〔保守2〕（$F(1,136)=4.058$，$p<.05$）だけだが，革新的態度項目では，項目15〔革新2〕（$F(1,136)=11.055$，$p<.01$），17〔革新4〕（$F(1,136)=5.910$，$p<.05$），20〔革新7〕（$F(1,136)=7.242$，$p<.01$）の3項目で，群に関する主効果がみられる。また，大衆社会的態度の項目では，項目36〔大衆10〕（$F(1,136)=4.495$，$p<.05$）で群に関する主効果がみられるほか，項目31〔大衆5〕（$F(1,136)=5.027$，$p<.05$）と，項目35〔大衆9〕（$F(1,136)=11.787$，$p<.01$）では，群に関する主効果と学年に関する主効果がみられる。

群の主効果がみられた項目の，群ごとの学年別平均値を図2(1)〜(7)に示した。項目2〔保守2〕「女が政治などに口だしすべきでない」では，完全データ群よりも追加群の平均値の方が小さく，追加群の方が保守的でない傾向にある。革新的態度に含まれる3項目，項目15〔革新2〕「正しいことであれば世間体など気にすべきではない」，17〔革新4〕「社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである」，20〔革新7〕「先輩の意見でも，まちがっていると思えば，納得できるまで議論する」の3項目では，いずれも完全データ群よりも追加群の平均値の方が大きく，これらの項目では追加群の方が革新的態度の傾向が強い。また，大衆社会的態度の項目のうち，群に関する主効果のみられた3項目，すなわち項目31〔大衆5〕「中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい」，35〔大衆9〕「共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする」，36〔大衆10〕「ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどうだ」では，いずれも完全データ群よりも追加群の平均値の方が小さく，追加群の方が大衆社会的でない傾向が強い。

以上の結果から，女子の場合も完全データ群と追加群との間に顕著な差はないが，群の主効果のみられた項目に関していえば，完全データ群よりも追加群の方が革新的態度の傾向が強く，保守的態度と大衆社会的態度の傾向が弱い。

3. 各態度の内的整合性の検討

本研究では，各態度の内的整合性の指標として，Cronbach のα係数（標準化された値）を求め，さらに各態度を構成する項目の個別得点と合成得点との相関を求めた。完全データ群については，中学1年から高校III年までの結果を，追加群については高校I年からIII年までの結果を，表6，表7に示した。以下では主として，完全データ群についてみていく。

1）保守的態度

表6にしたがって完全データ群の男子の結果をみると，個別得点と合成得点との相関は全体にあまり高くないことがわかる。またα係数も .452から .703の範囲の値をとっており，必ずしも信頼できる尺度構成がなされているとはいえない。学年ごとの結果をみると，α係数は中学1年から高校I年にかけて徐々に低くなっている。また，個別得点と合成得点との相関も，高校I年までは，全般に値が低い。

ここで，中学・高校の6年間にわたって相関の高い項目をさがしてみよう。表6から該当する項目を選び出してみると，項目1，3，6，11，13などがあげられる。これらの項目が保守的態度の項目の中では比較的相関の高い，いわば，われわれが設定した枠組に近い項目である。

表7に基づいて，同じように，女子の結果をみてみよう。α係数は .658から .794の範囲の値をとっており，ほぼ

表 6　各社会的態度の個別項目得点と合成得点との相関係数およびα係数（男子）

項目番号＼学年＼群	完全データ群						追加群		
	中 1	中 2	中 3	高 I	高 II	高 III	高 I	高 II	高 III
1	0.237	0.193	0.408	0.306	0.357	0.214	0.296	0.102	0.349
2	− 0.009	0.084	0.043	0.136	0.207	0.468	0.300	0.245	0.319
3	0.348	0.242	0.294	0.088	0.386	0.299	0.346	0.198	0.358
4	0.016	0.196	0.295	0.022	0.147	0.221	0.364	0.261	0.540
5	− 0.067	− 0.028	0.180	0.211	0.227	0.372	0.298	0.153	0.324
6	0.302	0.339	0.250	0.244	0.300	0.493	0.524	0.435	0.515
7	0.154	− 0.010	− 0.033	0.101	0.158	0.196	0.342	0.255	− 0.076
8	0.343	0.146	− 0.057	0.300	0.114	0.186	0.389	0.337	0.271
9	0.178	0.459	0.268	0.044	0.221	0.488	0.385	0.372	0.273
10	0.158	0.123	0.296	0.112	0.282	0.281	0.349	0.427	0.292
11	0.387	0.263	0.159	0.373	0.392	0.287	0.488	0.425	0.551
12	0.189	0.307	0.025	− 0.055	0.255	0.321	0.536	0.032	0.414
13	0.509	0.250	0.175	0.245	0.364	0.437	0.333	0.226	0.484
	(0.542)	(0.517)	(0.478)	(0.452)	(0.621)	(0.703)	(0.759)	(0.626)	(0.729)
14	0.149	− 0.012	0.119	0.225	0.195	0.295	0.523	0.230	0.203
15	− 0.051	0.368	0.482	0.406	0.413	0.432	0.169	0.170	0.595
16	− 0.038	0.357	0.141	0.208	0.186	0.518	0.467	0.349	0.469
17	0.098	0.117	0.202	0.282	0.387	0.347	0.412	0.388	0.345
18	0.092	0.372	− 0.011	0.202	0.512	0.413	0.318	0.147	0.487
19	− 0.081	0.063	− 0.007	0.285	0.304	0.544	0.138	0.105	0.326
20	0.087	0.206	0.500	0.423	0.440	0.383	0.391	0.257	0.440
21	0.160	0.205	0.239	0.305	0.531	0.372	0.401	0.459	0.424
22	0.432	− 0.276	0.059	− 0.086	− 0.041	0.075	0.291	0.095	0.400
23	− 0.006	0.049	0.120	0.086	0.013	0.081	0.236	0.222	0.311
24	− 0.115	− 0.217	0.120	0.000	0.162	0.104	0.156	0.204	0.196
25	− 0.167	0.184	0.241	0.247	0.305	0.103	0.010	0.129	0.046
26	0.017	0.552	0.431	0.475	0.479	0.282	0.490	0.225	0.322
	(0.152)	(0.403)	(0.523)	(0.585)	(0.665)	(0.679)	(0.690)	(0.576)	(0.728)
27	0.410	0.306	0.265	0.580	0.408	0.455	0.440	0.551	0.386
28	0.154	0.313	0.231	0.199	0.162	0.428	0.297	0.237	0.308
29	0.535	0.285	0.213	0.354	0.473	0.543	0.349	0.404	0.410
30	0.383	0.327	0.477	0.567	0.399	0.455	0.314	0.417	0.578
31	0.482	0.432	0.354	0.620	0.548	0.653	0.616	0.559	0.492
32	0.339	0.349	0.366	0.419	0.503	0.481	0.582	0.355	0.277
33	0.261	0.219	0.124	0.246	0.310	0.263	0.063	0.278	0.271
34	− 0.039	0.147	0.301	0.177	0.305	0.274	0.287	0.135	0.162
35	0.283	0.201	0.246	0.119	0.278	0.371	0.066	− 0.083	0.228
36	0.591	0.451	0.513	0.554	0.438	0.599	0.412	0.614	0.540
37	0.219	0.321	0.241	0.221	0.254	0.208	0.498	0.137	0.353
38	0.366	0.359	0.388	0.506	0.520	0.636	0.477	0.125	0.365
39	0.489	0.412	0.395	0.477	0.346	0.491	0.246	0.309	0.443
	(0.725)	(0.695)	(0.695)	(0.763)	(0.759)	(0.814)	(0.732)	(0.679)	(0.749)

注）（　　）内の数字はα係数を示す。表7も同様である。

表 7　各社会的態度の個別項目得点と合成得点との相関係数およびα係数（女子）

項目番号＼学年＼群	完全データ群						追加群		
	中 1	中 2	中 3	高 Ⅰ	高 Ⅱ	高 Ⅲ	高 Ⅰ	高 Ⅱ	高 Ⅲ
1	0.192	0.150	0.373	0.445	0.497	0.492	0.355	0.454	0.372
2	0.183	0.296	0.279	0.245	0.503	0.585	0.389	0.331	0.414
3	0.376	0.261	0.188	0.375	0.489	0.429	0.223	0.294	0.186
4	0.436	0.295	0.080	0.198	0.091	0.274	0.287	0.270	0.348
5	0.196	0.178	0.412	0.285	0.156	0.245	0.436	0.411	0.438
6	0.451	0.442	0.229	0.185	0.450	0.518	0.397	0.435	0.626
7	0.507	0.284	0.122	0.176	0.158	0.281	0.295	0.236	0.225
8	0.305	0.483	0.140	0.328	0.120	0.353	0.390	0.313	0.272
9	0.629	0.394	0.382	0.269	0.252	0.521	0.372	0.260	0.420
10	0.462	0.313	0.379	0.219	0.146	0.358	0.183	0.343	0.238
11	0.407	0.500	0.485	0.622	0.454	0.559	0.343	0.426	0.416
12	0.293	0.515	0.279	0.413	0.418	0.405	0.026	0.397	0.173
13	0.566	0.373	0.437	0.421	0.428	0.511	0.411	0.560	0.534
	(0.758)	(0.723)	(0.658)	(0.694)	(0.688)	(0.794)	(0.691)	(0.741)	(0.734)
14	0.240	0.248	0.241	0.233	0.470	0.460	0.117	0.352	0.228
15	0.154	0.242	0.254	0.364	0.436	0.395	0.327	0.401	0.207
16	0.141	0.063	0.233	0.150	0.155	0.192	0.248	0.102	0.197
17	0.281	0.374	0.494	0.237	0.463	0.394	0.340	0.223	0.120
18	0.380	0.233	0.107	0.289	0.368	0.015	0.366	0.420	0.367
19	0.275	0.311	0.387	0.166	0.061	0.378	0.263	0.197	0.403
20	0.114	0.306	0.449	0.121	0.190	0.396	0.170	0.181	0.469
21	0.412	0.211	0.324	0.115	0.261	0.171	0.068	0.141	0.368
22	−0.068	0.341	0.283	0.183	0.470	0.466	0.115	0.245	0.103
23	0.135	0.160	0.387	0.346	0.113	0.353	0.249	0.304	0.281
24	0.215	0.319	0.138	0.315	0.299	0.295	0.023	−0.056	0.109
25	0.063	0.245	0.063	0.230	0.166	0.222	0.175	0.177	0.197
26	0.304	0.329	0.455	0.317	0.364	0.516	0.281	0.247	0.352
	(0.528)	(0.624)	(0.664)	(0.581)	(0.666)	(0.706)	(0.549)	(0.573)	(0.618)
27	0.507	0.434	0.339	0.259	0.396	0.413	0.201	0.531	0.479
28	0.192	0.149	0.017	0.390	0.355	0.446	0.233	0.313	0.302
29	0.472	0.373	0.396	0.456	0.338	0.402	0.142	0.288	0.492
30	0.380	0.227	0.259	0.448	0.402	0.496	0.360	0.512	0.391
31	0.474	0.622	0.446	0.506	0.563	0.534	0.425	0.529	0.464
32	0.352	0.505	0.562	0.426	0.527	0.419	0.334	0.480	0.349
33	0.390	0.217	0.402	0.285	0.306	0.391	0.110	0.340	0.298
34	0.332	0.086	0.180	0.200	0.309	0.336	0.237	0.456	0.223
35	0.210	0.219	0.376	0.413	0.242	0.179	−0.103	0.098	0.008
36	0.553	0.416	0.611	0.435	0.474	0.589	0.467	0.527	0.447
37	0.288	0.309	0.482	0.443	0.426	0.435	0.201	0.195	0.157
38	0.373	0.408	0.310	0.534	0.412	0.369	0.262	0.440	0.284
39	0.320	0.402	0.487	0.468	0.461	0.431	0.306	0.301	0.212
	(0.749)	(0.716)	(0.750)	(0.782)	(0.776)	(0.791)	(0.600)	(0.760)	(0.690)

満足できる尺度が構成されていると考えられる。また，学年間の変動も顕著なものではない。一方，個別得点と合成得点との相関をみると，項目1，2，3，6，8，9，10，11，12，13の10項目でかなり安定した数値が得られており，中学1年から信頼できる尺度が構成されていると考えられる。なお，中学・高校を通じて相関が高い項目の中から男女に共通するものをあげてみると，項目1〔保守1〕「国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい」，項目3〔保守3〕「結婚は家柄を重んじなければならない」，項目6〔保守6〕「長男が家をつぐのは当然だ」，項目11〔保守11〕「日本は天皇を中心にまとまるべきである」，項目13〔保守13〕「家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい」などであり，いわゆる伝統的価値観に関する項目の多いことがわかる。

2）革新的態度

表6に示したように，男子の場合α係数は.152から.679の範囲の値をとっており，とくに中学1年での値が低い。個別得点と合成得点との相関をみても，中学の3年間はもとより，高校においても相関の低い項目が多くみられ，全体として尺度の安定性・信頼性は低い。ただし，中学に比べれば高校では，尺度として徐々にまとまりつつあるといえる。このような状況であるから，中学・高校を通じて相関の高い項目はほとんどないが，その中では，項目15，17，20，21，26などが比較的安定した項目である。

女子の結果を表7にしたがってみていく。α係数は，.528から.706の範囲にあり，男子に比べるとかなり数値が高く，しかも中学1年から高校Ⅲ年まで変動は少ない。学年ごとに個別得点と合成得点との相関をみると，一部に低い相関もみられるが，全体としては信頼性の高い尺度が構成されている。項目別に相関の推移をみると，項目14，15，17，19，20，22，24，26などでは中学から高校にかけてほぼ一貫して高い相関を示している。

なお，中学・高校を通じて相関が高い項目の中から男女に共通する項目をあげてみると，項目15〔革新2〕「正しいことであれば世間体など気にすべきではない」，項目17〔革新4〕「社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである」，項目20〔革新7〕「先輩の意見でも，まちがっていると思えば，納得できるまで議論する」，項目26〔革新13〕「家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである」などである。

3）大衆社会的態度

表6から明らかなように，男子の場合，α係数は.695から.814の範囲の値をとっており，いずれの学年においてもかなり信頼性の高い尺度が構成されているといえる。個別得点と合成得点との相関は，中学・高校の6年間を通じてかなり高く，中学1年の時点から概ね信頼できる尺度が構成されている。女子に関する結果も，男子とほぼ同じである（表7）。すなわち，α係数は.716から.791の範囲の値をとっており，個別得点と合成得点との相関もほとんどの項目において中学1年から高校Ⅲ年にいたるまで，かなり安定した値を得ている。これらの結果から，大衆社会的態度では男女とも，中学1年の時点からわれわれの設定した枠組にかなり一致した態度を形成していることがわかる。

ところで，完全データ群の結果と比べて，追加群の結果はどうであろうか。表6，表7に示したように，追加群の結果は，男女とも完全データ群の結果（とくに高校Ⅰ年からⅢ年の結果）とほとんどちがいがない。つまり，追加群でも全体として，男女を問わず，保守的態度と大衆社会的態度のα係数が高く，革新的態度のα係数が低い傾向にある。

以上の結果から，男子の大衆社会的態度と女子の3つの態度では，いずれも信頼性の高い尺度が構成されたといえる。

Ⅳ　討　　論

1. 本研究で得られた結果の概要

本研究では，中学生・高校生の社会的態度の形成過程を明らかにするために収集された中学1年から高校Ⅲ年までの6年間の資料の代表性を検討すること，および6年間に社会的態度がどのように構造化していくのかを検討することを目的として，資料が分析された。この目的のために，中学・高校の6年間もれなく調査を受けた完全データ群の資料と，同一高校に入学して高校Ⅰ年から新たに調査対象となった者のうち，完全データ群と同じ時期に学校生活を送った追加群の資料とが分析に用いられた。その結果，つぎのことが明らかにされた。

1）完全データ群と追加群の平均値および相関の比較

①高校3年間の態度得点の平均値について比較したところ，保守的態度，革新的態度，大衆社会的態度のいずれに関しても，男女を問わず両群の間には有意な差はみられない。

②高校3年間の各態度の時点間相関は，男女を問わず3つの態度とも完全データ群でも追加群でも，有意な正の相関がみられる。

③両群とも，保守的態度と革新的態度との間および革新的態度と大衆社会的態度との間には負の相関が，また大衆社会的態度と保守的態度との間には正の相関が認められる。

④項目別平均値を両群で比較したところ，男子の4項

目，女子の7項目で群差がみられる。

2) 各態度の内的整合性について

①完全データ群の資料に基づいて，各態度のα係数の学年間の推移をみると，男子の大衆社会的態度および女子の3つの態度でかなり高い数値を得ている。

②個別得点と合成得点との相関によれば，男子の大衆社会的態度および女子の3つの態度では中学1年から信頼できる尺度が構成されている。また男子の保守的態度と革新的態度は、高校Ⅰ年以降次第に信頼性が高くなる。

以上の結果から，態度得点の平均値や各態度の各種相関に関する限り，完全データ群と追加群との間に顕著なちがいはみられないことがわかる。また，項目水準でみても，群間差のみられた項目はわずかであり，項目全体から考えると，両群の間にはほとんどちがいがみられないと考えてよいだろう。ただし，各態度の信頼性，内的整合性についての検討結果は，男子の保守的態度および革新的態度が中学生の段階ではやや不安定であることを示している。この点については，項を改めて検討する。

2. 縦断的資料の代表性について

われわれは，これまで中学・高校の6年間に社会的態度がどのように発達し変化するかを，縦断的資料に基づいて検討してきた（久世ほか，1979，1980，1981a，1981b，1982)。この研究で分析された資料の被調査者は，名古屋大学教育学部附属中学校に昭和47年度，48年度，49年度にそれぞれ入学し，その後昭和50年度，51年度，52年度に同附属高校へ進学し，昭和52年度，53年度54年度に卒業した生徒である。この男女それぞれ70名，計140名から得た資料に基づく知見が，青年期の社会的態度の形成・変容過程をどの程度明らかにしているか，いいかえれば，ここで得られた資料の代表性はいかなるものか，についての検討は，これまで詳しくなされてこなかった。

研究が開始された時点では，名古屋市郊外の近郊都市にある公立中学校および高校の生徒を対象とした調査を行ない，名古屋大学教育学部附属中学校・高校の生徒の結果と比較している（久世・速水，1974)。そこでは，態度得点の水準で比較すると，高校生段階では学校差はないが，中学生とくに3年生では，近郊都市の中学生の方がより保守的であり，革新的でなく，大衆社会的であるということが見出された。そして，このちがいは，農村という生活環境にあると考えられた。

上記の知見は，横断的資料に基づいたものであるが，本研究で得られたような，縦断的資料の場合には，研究の対象となった学校の生徒が，青年の代表とみなされるかどうかという観点から資料の代表性を検討しておくことが必要であろう。中学1年の段階では，毎年男女それぞれ40名ずつあわせて約80名が調査を受けているので，仮に全員が最後まで有効調査対象として残っておれば，本研究で分析の対象となったコホートでは男女120名ずつ計240名の資料が利用できるはずである。しかし実際には，約40%の調査対象が何らかの理由で脱落している。その理由は定かではないが，①2回目以降に調査を受けないことがあった，②調査は受けたが回答もれがあった，などが主なものであろう。第2の理由で除かれた資料の扱い方についてはいろいろな考え方があろうが，本研究ではすべて不適切な資料として除外した。このような経緯をへて最終的に男女あわせて140名の資料が残ったのである。この資料の代表性を検討するために，本研究では附属中学以外の中学校を卒業し，調査対象と同じ年度に附属高校へ入学した生徒の資料を用いて比較した。

分析の結果，態度得点の水準では，両群の間に全くちがいはみられず，縦断研究の対象となっている完全データ群が，追加群を含むコホートを代表していると考えられた。また，39の項目水準でみても全体としては顕著なちがいはないと考えられた。ただし，分散分析の結果に基づいて項目別平均値を比較してみると，有意差のみられた項目の傾向としては，男女とも完全データ群よりも追加群の方が，保守的傾向と大衆社会的傾向が弱く，革新的傾向が強いことがわかる。このような傾向は，多くが高校Ⅰ年の段階から認められるが，追加群の資料は中学校段階では収集されていないので，このちがいについて詳しく検討することは不可能である。しかし，これまでにわれわれが行なってきた高校生に対する面接調査（久世ほか，1977）の結果を考えると，社会的態度の形成がはじまる中学生時代をどのような生活環境で過ごしたか，どのような体験をしてきたかが重要な要因になるだろう。面接調査で明らかにされたところでは，社会的態度の変化の要因として，進学・進路問題，学校環境，友人関係，政治・社会的問題，個人的体験などが考えられた。これらの要因はそれぞれ，青年にさまざまな影響を及ぼすと思われる。また，社会的態度は，それ自体，時代の影響を受けることも事実である。

最近，発達研究を進める方略の1つとして，縦断的研究を補足するために，コホート分析法の重要性が指摘されている。とくに社会的態度のように時代の影響を受ける側面については，なるほどコホート分析が可能になる資料の収集が計画される必要もあろう。しかし，一部の項目で完全データ群と追加群との間に差がみられたように，同じコホートの中での差をもたらす条件，とくに環境要因についての検討を進める必要があるだろう。これは，今後の課題として残されている問題である。

なお，このほかに，縦断研究において最後まで有効資料として残った対象の特徴に関する検討も，今後必要になると思われる。

3. 社会的態度の形成過程

われわれは，青年期の社会的態度を保守的，革新的，大衆社会的という3つの側面から捉えることにして，それぞれの態度について13項目からなる質問項目を構成した。そして尺度の信頼性・安定性を検討するために，個別得点と合成得点との相関ならびにα係数を求めた。その結果，男子の大衆社会的態度および女子の3つの態度では中学1年からかなり信頼性の高い尺度が構成されているが，男子の保守的態度と革新的態度は，中学の3年間では信頼性がかなり低いこと，また，高校に入っても革新的態度の信頼性はあまり高くならないことが示された。

このような傾向は，これまで横断的資料によって指摘されてきた結果と一致している（久世・速水，1974)。すなわち，全般的に中学生から高校生にかけてα係数が高くなる傾向にあるという。例えば，革新的態度の場合には，中学男子で.456，高校男子で.735，中学女子は.597，高校女子は.697となっている（久世・速水，1974)。このように，横断的資料によっても中学男子における革新的態度の信頼性が低いことがわかる。

さらに，久世・速水（1975）によれば，横断的資料に基づいて個別得点と合成得点との相関を求めたところ，負の相関はみられなかったものの，39項目のうち，中学男子で3項目，中学女子で1項目の相関がとくに低い。これらの項目は，男子では項目23*（.136)，24（.125)，25（.125），女子では項目4（.190）であるが，本研究においても相関の低い項目である。

本研究での縦断的資料に基づいた分析では，男女とも大衆社会的態度が中学1年の時点ですでにかなり安定していること，女子においては保守的態度，革新的態度とも中学1年の時点で安定した傾向をみせていること，男子の場合には保守的態度と革新的態度での安定化がみられるのは中学の後半から高校になってからであることなどが，すでに示されている（久世ほか，1980)。われわれは，これまで，社会的態度の形成過程について，中学1年では3つの態度が独立で構造化されていないが，その後3つの態度間にある程度構造化がなされること，さらにこの構造化・安定化の過程は，大衆社会的態度の水準によって違いがみられることを指摘してきた（久世ほか，1979，1980)。これらの主張は，おもに態度間相関の推移に基づいてなされてきたものであるが，今回，各態度の信頼性と安定性についての検討によって，態度の構造化の過程に関する主張が裏付けられたと考えることができる。

一方，態度の形成時期と性差という観点からこれらの知見を再検討する時，男子において保守的態度と革新的態度の安定化が中学の後半から高校生の時期に達成されるのに対し，女子の場合には3つの態度が中学1年の時点ですでにかなり安定化しているということを，どのように考えればよいのだろうか。1つには，女子に比べて男子は態度の安定化が遅れるという考え方が成り立つ。しかしまた，女子の安定化は親の価値観を小学生時代に受容したままの状態であることを意味するのに対し，男子の場合は，中学1年の頃すでに小学生時代に受容した親の価値観を再検討する時期に入っているために，しばらく不安定な状態にあり，その後しだいに安定化していくのだろうという考え方もある。

いずれにしろ，青年期における社会的態度の形成過程を明らかにするには，青年期以前と青年期以後の社会的態度の様相についてあわせて検討する必要があろう。

* 久世・速水（1975）では，それぞれ項目番号（29)，(32)，(35)，(10）と表示されているが，ここでは本研究での表示方法にしたがって，項目番号を変えてある。

文　　献

久世敏雄・速水敏彦　1974　中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅰ）　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科)，**21**，1－11.

久世敏雄・速水敏彦　1975　中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅱ）　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科)，**22**，13—24.

久世敏雄・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美・池田博和・伊藤義美・石黒敬子　1977　中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅲ）　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科)，**24**，67—83.

久世敏雄・浅野敬子・伊藤義美・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美・池田博和　1978　中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅳ）　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科)，**25**，119－129.

久世敏雄・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・池田博和・伊藤義美・浅野敬子　1979　中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（Ⅰ）　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科)，**26**，17—35.

久世敏雄・後藤宗理・浅野敬子・宮沢秀次・二宮克美・池田博和・伊藤義美　1980　中学生・高校生の社会

的態度に関する縦断的研究（Ⅱ）　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），27，65—87.
久世敏雄・宮沢秀次・二宮克美・後藤宗理・浅野敬子・池田博和・伊藤義美　1981a　中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（Ⅲ）　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），28，99—149.
久世敏雄・二宮克美・宮沢秀次・後藤宗理・浅野敬子・池田博和・伊藤義美　1981b　中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（Ⅳ）　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），28，151—170.
久世敏雄・宮沢秀次・浅野敬子・後藤宗理・二宮克美・池田博和・伊藤義美　1982　中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（Ⅴ）　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），29，175－204.

（1983年7月31日　受稿）

A SUPPLEMENTARY ANALYSIS OF "A LONGITUDINAL STUDY OF SOCIAL ATTITUDES OF ADOLESCENTS"

Toshio KUZE, Motomichi GOTO, Keiko ASANO, Katsumi NINOMIYA,
Shuji MIYAZAWA, Hisako MUNEKATA and Hisashi OHNO

The present study has two purposes; the first is to present additional results in order to support the findings reported in earlier studies, and the second is to examine stability in the structure of three social attitudes during the period from secondary to highschool education.

The social attitudes for the present study consist of three scales: conservative, radical, and mass-social. Each scale contains 13 items. The subjects are boys and girls in the upper and lower secondary schools affiliated to the Faculty of Education of Nagoya University. The longitudinal data were obtained by monitoring once a year the same group of students. The perfectly matched data throughout six monitoring points during the secondary and highschool years were obtained from 140 students (70 boys and 70 girls). They started the secondary school in three different years (in 1972, 1973, and 1974) and all graduated the highschool 6 years later (in 1977, 1978, and 1979). Partially matched data were obtained from 138 highschool students (70 boys and 68 girls), who started the highschool in three different years (in 1975, 1976, and 1977) and graduated from it 3 years later (in 1977, 1978, and 1979).

Major results of the analysis are summarized as follows.

I. The data of the perfectly matched group obtained through fourth to sixth grades were compared with those of the partially matched group.

(1) No differences of mean scores were found among groups for each social attitude scale in boys and girls.

(2) For each scale of the social attitude, correlation coefficients calculated across three monitoring periods remained at significantly high levels.

(3) Within each grade, the conservative attitude was found negatively correlated with the radical attitude, while correlations between radical and mass-social scales were negative. And the positive correlations were found between mass-social and conservative attitudes.

(4) At the individual item level, no differences of mean scores were found among groups, except for 4 items in boys and 7 items in girls.

II. In order to examine stability in the content structure of each scale over time, reliability coefficients were

calculated through secondary and highschool years by using the data derived from the perfectly matched group.
(5) The reliability coefficient (Cronbach's alpha) for every social attitude scale was found significantly high across the first to sixth grades for girls. For boys, however, the same pattern was observed in mass-social attitude only.
(6) Among boys, alpha coefficients for the conservative and radical scales tended to be high across fourth to sixth grades.